直言

医療界ナンバーワンの働きたい職場へ DXなどの取り組みを一段と活発化！

ロボットも積極的に導入し地域医療に貢献

南部徳洲会病院（沖縄県）院長　服部 真己

院長就任後1年4カ月余り、当院の新しい未来に向け、大きな発展の地ならしの期間でした。小生にとっては毎日が駆け抜けるように過ぎつつも、日々多くの勉強をさせていただきました。

コロナ禍により当院もクラスター（感染者集団）を繰り返しながら奮闘する日々です。第5波ではコロナ病床を当初の9床から39床に増床しましたが、さらに感染力が強い第7波が本格化しており、医療逼迫がかつてないほど深刻で、コロナだけでなく非コロナの救急体制も破綻状態に近づいています。近隣の救急体制が機能低下し、当院に発熱患者さんを中心に救急搬送が集中し、7月の救急搬送件数は823件と当院のこれまでの目標350件の2倍超。十分でない体制で、救急を断らない医療を実践する職員の頼もしい姿を心から誇りに思います。現在の医療逼迫が、できる限り早く改善されることを切に願います。

日本エクモネットからの支援 コロナ重症患者さん無事回復

コロナ診療について印象深いことを紹介します。

昨年6月に初めてECMO（体外式膜型人工肺）症例を経験しました。通例では他の重症担当病院に転院するのですが、他院に余力がなく、当院で治療を続けました。心臓血管外科、呼吸器内科、総合診療科が協力体制を取り、看護部はコロナ病棟とICU（集中治療室）が協力し、総力を挙げ診療にあたりましたが、未経験の不安から押しつぶされそうななか、コロナ重症患者さんの診療を全国的に支援するNPO法人日本エクモネットを通じ、即座に県外医療機関から医師、看護師にサポートいただきました。同ネットによれば、ECMOによる救命率は60％超とされていますが、患者さんは無事回復され、歩いて退院されました。支援していただいた方々に心から感謝します。

また、当院職員の患者さんを救いたいという熱意と頑張りを結集でき、それが結実したことを院長として、とても誇りに感じています。心強いスタッフと共に当院は〝生命だけは平等だ〟を基本とし、できる限り救急を応需し、年中無休24時間オープンの「断らない診療」をこれまで同様実践していきます。

昨年7月には、平安名常一副院長を迎え放射線治療部が充実し、昨年のIMRT（トモセラピー）は全国15位、SBRT（サイバーナイフ）は全国6位の実施数を記録しました。また、診療時間を延長し、患者さんが仕事を休まず、治療を続けられる体制を整えました。

10月には国産初の手術支援ロボット「hinotori」を導入し、まず前立腺手術を開始しました。今後は適応疾患の広がりに応じ、他の領域にも活用して手術のレベルアップを図っていきます。

また、10月は再生医療の取り組みについて、プレス発表を行いました。前立腺手術後の尿失禁に対し、脂肪組織からの幹細胞を使用し機能回復を図る全国初の治療です。今後は、さらに多くの分野で再生医療を実践したいと考えています。

JCI認証2回目の更新 「最高の称賛」勝ち得る

12月には国際的な医療機能評価のJCI認証を更新しました。15年に初めて取得してから18年に続き2回目の更新です。コロナ禍でリモート審査になり、前回よりも厳しい基準で、コロナ対応を続けながらの準備と受審になったため、とても大変でしたが、今回も前回より良い評価でした。審査員から当院の誠実に取り組む姿勢に対し最高の称賛（ショーストッパー）をいただき大変うれしく思っています。

今年4月には興座浩次副院長をはじめ5人の麻酔科医を新たに迎え、また手術室も拡張し、多くの手術症例に対応できる体制を整えました。

整形外科手術支援ロボットMakoシステムも導入し、IMRT、SBRT、hinotoriとともに診療支援ロボットもさらに積極採用していきたいと思います。DX（デジタル変革）の取り組みも一段と活発化させ、モバイル電子カルテ端末、AI（人工知能）問診、外来の診療支援アプリなどの導入も予定しています。これらにより、東上震一理事長が提唱されている「医療界ナンバーワンの働きたい職場」を実現していきます。

6月25日、理事長選挙の際、多くの院長先生方の話を拝聴し、学びを得る貴重な機会となりました。同じ理念、哲学を守り奮闘されている先生方と一緒にいるだけで、心強い気持ちになりました。さらに地域に貢献できるよう、皆で頑張りましょう。

生駒病院

開院8年目を記念 特別医療講演開く

生駒市立病院（奈良県）は6月24日、開院8年目を記念し市内のホールで特別医療講演を開催した。当日は地域の方など30人が参加。小紫雅史・生駒市長も駆け付けた。講師を務めた遠藤清院長らは開院当時を振り返るとともに、自院の成長ぶりをアピールした。

自院の成長ぶりを語る遠藤院長

冒頭、小紫市長が挨拶。開院時から現在までを振り返り、あらためて遠藤院長や病院スタッフ、地域の方をはじめとする関係者に謝意を表した。今後については「市民の新たなニーズにどう応えていくかが大事」とし、同院のさらなる発展に期待を寄せた。

講演では辻川美代子・看護部長が自院の歩みを紹介。開院時は常勤医師8人、スタッフ193人だったが、現在は常勤医師24人、スタッフ300人超にまで拡充したことなどを示した。開院する際に地域から強く求められたことのひとつ「産科」についても説明し、助産師は開院時の2倍強、分娩件数は右肩上がりで推移している状況などを報告した。

同じく地域から強く求められた「小児科」については、金子直人・小児科部長が説明。長らく常勤医師1人体制だったが、現在は4人体制になっていること、コロナ禍による受診状況の変化などを示した。得意分野としてアレルギー領域、腎臓領域を挙げ、それぞれの疾患や症状について解説、新たな取り組みとして昨年10月から県の「小児科病院二次輪番体制」に参加していることを報告。

小紫市長は最後まで講演を聞き入っていた

今後は「市立病院として数は少なくても確実にあるニーズにも目を向けていきたい」とし、医療的ケア児、施設で過ごす小児、発達が遅れている小児、不登校児童などへの対応を挙げた。

最後に遠藤院長が新型コロナに対する取り組みを説明。また、開院当時と比べ患者数が外来では3倍超、入院では1・5倍超に伸びていることを示し「今後も皆さんの期待に応えていきたい」と締めくくった。

トライやる・ウィーク

神戸病院が開催

神戸徳洲会病院は「トライやる・ウィーク」を開催した。これは兵庫県が阪神・淡路大震災などを機に、1998年度から実施している県内の中学2年生を対象とした職場体験。今回は地元中学校から3人の学生が参加、希望部署の体験に加え、BLS（一次救命処置）講習や患者体験などを行い、最終日には中村美津・看護部長が参加者と学んだことなどを振り返った。

参加者からは「職員の皆さんが優しくて楽しく過ごせた」、「自分が目指す職業の大変さ、やりがいがわかった」など感想が聞かれた。冨田雅史院長は「学生さんから大きな刺激をもらった。医療従事者として誇りをもって、これからも地域医療に努めたい」、中村・看護部長は「学生さんの将来の目標がより明確になったようで良かった。医療従事者になった際は、ぜひ頑張ってほしい」とエールを送った。6月6日から5日間実施。

BLS講習を受ける参加学生

病気のはなし 98

特定健診の受診を

メタボリックシンドローム

年齢を重ねるにつれ活動量が低下し、代謝も悪くなるため、若い頃と同じ食生活をしていると太りやすくなる。メタボリックシンドロームは内臓脂肪型の肥満（腹囲：男性85cm以上、女性90cm以上）に加え高脂血症、高血圧、高血糖のうち2つ以上該当する状態を指す。これ自体は疾患ではないが、動脈硬化を促進するうえ、将来的に脳梗塞や心筋梗塞などにかかるリスクも高くなる。このため、その前段階で介入し、生活習慣を改善することを目的に、日本では40～75歳未満を対象とした特定健康診査（特定健診）を実施。高リスク者には運動療法指導や栄養療法指導など特定保健指導を行っている。

「メタボリックシンドロームは指標のひとつですが、数多くの疾患の根本とも言える状態で、早めの対策が大切です」と松原中央病院（大阪府）の木野博文院長。にもかかわらず、2020年度の特定健診対象者のうち、実際に健診を受けた人は53.4%にとどまる。「生活習慣は独力ではなかなか変えられません。自分の状態を知るためにも特定健診を受けていただきたい」と木野院長。内臓脂肪を減らすには1日30分、週5回の少し息が切れる程度の有酸素運動が望ましいが、急激なダイエットは身体に良くないだけでなく継続が難しい。日常生活で、できるだけ階段を使う、通勤時ひと駅歩く、1日数回ラジオ体操を行うなど無理のない範囲での運動も推奨している。